

大学生の学校嫌悪感と怠学傾向および居場所に関する検討

——学校嫌悪感と怠学傾向による類型化の試み——

水口啓吾・高野恵代・池田龍也

The relationship between aversion to school, tendency to neglect one's schoolwork and *ibasho* in undergraduate students: Typology based on dislike of school and tendency to neglect studies

Keigo Minakuchi, Yasuyo Takano, and Tatsuya Ikeda

The purpose of this study is to typologies college students' dislike of school and their tendency to neglect studies, and to understand the characteristics of each type. Hierarchical cluster analysis was used to develop the typology. The analysis extracted the following three types: 1) Students who desired to transfer to a different university, 2) students who were inactive and negligent of their studies, and 3) students who adapted to college life. The group of students who desired to transfer to a different university not only did not actively interact with others during their college life, they also displayed the characteristic of feeling that there were no places where they belonged in the university (*ibasho*). The group of students who were inactive and negligent of their studies showed reduced desire to attend classes and do classwork; at the same time, they also displayed the characteristic of *not* disliking school so much that they wished to transfer out of it. The group of students who adapted to college life displayed the characteristic of being satisfied overall with college life. The above results suggest that in the case of students who desired to transfer to a different university, interpersonal relationships in college and the existence of places where they feel they belong have a greater influence on their dislike of school and intensity of the desire to transfer to a different university than does anxiety or dissatisfaction with college classes and study.

キーワード : aversion to school, tendency to neglect studies, cluster analysis

問題および目的

池田・水口・高野 (印刷中) は, 大学生における学校嫌悪感情および怠学傾向, そして居場所の関連を明らかにすることを目的として, 意欲低下領域尺度 (下山, 1995) および学校ざらい感情測定尺度 (古市, 1991) の因子構造の検討を行った。まず, 意欲低下領域尺度 (下山, 1995) について,

3 因子構造を確認的因子分析によって適合度を算出し、次いで探索的因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を実施することで、因子構造の適合度を算出し、比較検討した。その結果、適合度および探索的因子分析の因子負荷量から、因子構造は 4 因子解が妥当であることを示唆している。具体的には、第 1 因子として「学生生活意欲低下」因子、第 2 因子として「授業意欲低下」因子、第 3 因子として「学習意欲低下」因子、そして、第 4 因子として「注意散漫」因子を抽出した。

次に、学校ざらい感情測定尺度 (古市, 1991) について、1 因子構造を想定した確認的因子分析を実施して適合度の指標を算出すると共に、探索的因子分析を実施して 2 因子以上の因子構造である可能性を検討した。その結果、適合度の指標や、種々の因子数の指標から、2 因子解が妥当であることを示唆している。具体的には、学校そのものに対する漠然とした嫌悪感が特徴的である「大学嫌悪」因子と、転出を希求するほどの嫌悪感が特徴的である「転出希求」因子であった。しかしながら、池田他 (印刷中) では、各尺度の因子構造は明らかとなったものの、因子構造を踏まえての大学生の類型化、および、それらの具体的な特徴に関しては未検討であった。

そこで本研究では、池田他 (印刷中) の結果を踏まえて、大学に対する嫌悪感および怠学傾向による類型化を行い、各類型における特徴を明らかにすることを目的とする。なお、類型化を行うにあたり、本研究では、階層的クラスタ分析を用いて検討を行うこととする。

方 法

研究協力者 池田他 (印刷中) と同様であり、国立 A 大学の大学生 298 名 (男性 106 名、女性 191 名、性別不明 1 名) を対象とした。対象者の学年は、学部 1 年生 93 名、2 年生 57 名、3 年生 133 名、4 年生 10 名、博士課程後期 1 年生 1 名、研究生 1 名、学年不明者 3 名であった。

有効回答者 後述の質問紙に欠損のない者 285 名 (男性 105 名、女性 179 名、性別不明 1 名) を有効回答者とした。有効回答率は 95.63 %であった。

尺度構成 (1) 意欲低下領域尺度 (下山, 1995): 全 15 項目から構成される。5 件法 (1.あてはまらない～5.あてはまる) にて実施した。(2) 学校嫌い感情測定尺度 (古市, 1991): 全 12 項目から構成される。5 件法 (1.あてはまらない～5.あてはまる) にて実施した。(3) フェイス項目: 学年・所属・性別について尋ねた。なお、尺度 (1) と尺度 (2) の因子構造は池田他 (印刷中) に従った。

調査手順 無記名自記式の質問紙調査を集合法によって実施した。調査実施にあたり、本調査の主旨、調査に協力しないことで不利益が生じることはないこと、得られたデータは統計的に処理されるため公表された結果から個人が特定されることはないことを口頭および紙面によって教示し、以上の内容について同意できる者のみ回答し、回答を以って調査協力への同意とした。

分析手順 池田他 (印刷中) によって得られた意欲低下領域尺度 (1995) および学校ざらい感情測定尺度 (1991) における下位因子を用い、階層的クラスタ分析を実施した。各クラスタの特徴を詳細に検討するために、得られたクラスタを独立変数、投入された各因子得点を従属変数とした一元配置分散分析を実施した。

使用機材 統計解析には R ver.3.2.2 (R Core Team, 2014) を使用した。記述統計量および信頼性係数の算出のためにパッケージ “psych” (Revelle, 2015) を用いた。

結 果

記述統計量と信頼性係数 本研究にて使用した尺度の記述統計量と信頼性係数を Table 1 に示す。

有効回答者の類型化 意欲低下領域尺度および学校ざらい感情測定の下位因子得点による対象者の類型化のために、階層的クラスタ分析を実施した (ユークリッド距離の平方・ワード法)。その結果、デンドログラムおよび解釈可能性を考慮した上で、3 クラスタ解を抽出した。各クラスタにおける標準化得点を Figure 1 に、非標準化得点の記述統計量を Table 2 に示す。

各類型における分散分析 得られたクラスタを独立変数、クラスタ分析に用いられた因子得点を従属変数とする一元配置分散分析を実施した。なお、多重比較には Tukey 法を用いた。結果を Table 3 に示す。以下、各得点における主効果の結果を示す。

学生生活意欲低下得点を従属変数とした一元配置分散分析の結果、クラスタに有意な主効果が認められた ($F(2, 282) = 25.14, p < .001$)。多重比較の結果、第3 クラスタが最も低く、次に第2 クラスタが低く、第1 クラスタが最も高かった。

次に、授業意欲低下得点を従属変数とした一元配置分散分析の結果、クラスタに有意な主効果が認められた ($F(2, 282) = 42.52, p < .001$)。多重比較の結果、第3 クラスタが最も低く、次に、第1 クラスタが低く、第2 クラスタが最も高かった。

次に、学習意欲低下得点を従属変数とした一元配置分散分析の結果、クラスタに有意な主効果が認められた ($F(2, 282) = 11.31, p < .001$)。多重比較の結果、第3 クラスタの方が、第2 クラスタよりも低かった。

次に、注意散漫得点を従属変数とした一元配置分散分析の結果、クラスタに有意な主効果が認められた ($F(2, 282) = 73.85, p < .001$)。多重比較の結果、第1 クラスタの方が、第2 クラスタよりも低く、第3 クラスタの方が、第2 クラスタよりも低かった。

次に、大学嫌悪得点を従属変数とした一元配置分散分析の結果、クラスタに有意な主効果が認められた ($F(2, 282) = 72.78, p < .001$)。多重比較の結果、第3 クラスタが最も低く、次に第2 クラスタが低く、第1 クラスタが最も高かった。

最後に、転出希求得点を従属変数とした一元配置分散分析の結果、クラスタに有意な主効果が認められた ($F(2, 282) = 340.50, p < .001$)。多重比較の結果、第3 クラスタが最も低く、次に第2 クラスタが低く、第1 クラスタが最も高かった。

各類型における特徴の検討 まず、第1 クラスタは、“学生生活意欲低下”と“大学嫌悪”と“転出希求”の高さに特徴づけられた。これにより、この群は、大学生活において他者との接触や自己の存在意義の認識が低く、また、大学における居場所の存在が無いと感じていることが考えられた。また、大学自体に対する価値も低く、結果として、大学や所属学部への転出願望が強くなっている群であることが推察された。従って、これらの点を踏まえ、第1 クラスタを「転出渴求群」と命名した。

次に、第2 クラスタは、“授業意欲低下”と“学習意欲低下”と“注意散漫”の高さに特徴づけられた。これにより、この群は、大学生活における人間関係に対してではなく、大学の授業への参加や勉学に対する不満感や意欲の低下が強いことが考えられる。他方で、“転出希求”に関しては第1

クラスタのような高さは見られないことを踏まえると、授業や学業に対する不満や意欲の低下を抱きつつも、大学自体の転出を抱くほどの嫌悪感情ではないことが推察される。従って、これらの特徴を踏まえて、第2クラスタを「不活発怠学群」と命名した。

最後に、第3クラスタは、全ての下位因子の低さに特徴づけられた。これにより、大学生活や授業、勉強自体への意欲も高く、所属する大学自体への不満や嫌悪感も抱いておらず、全体として満足感を抱きながら大学生活を送っている群であることが推察される。従って、これらの特徴を踏まえて、第3クラスタを「大学適応群」と命名した。

Table 1
記述統計量と信頼性係数 ($n = 285$)

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>SE</i>	<i>Min</i>	<i>Max</i>	歪度	尖度	α
意欲低下領域尺度	37.53	7.73	0.46	20	58	0.12	-0.50	.72
学生生活意欲低下	11.45	3.64	0.22	5	23	0.38	-0.40	.70
授業意欲低下	6.75	3.14	0.19	3	15	0.69	-0.46	.77
学習意欲低下	11.25	3.02	0.18	4	20	0.18	-0.12	.60
注意散漫	8.08	2.48	0.15	3	14	0.21	-0.54	.52
学校ざらい感情測定尺度	24.31	7.85	0.46	12	59	1.10	2.14	.88
大学嫌悪	21.25	6.70	0.40	10	50	0.90	1.60	.87
転出希求	3.06	1.78	0.11	2	10	1.84	2.84	.79

Table 2
各クラスタの記述統計量

	第1クラスタ ($n = 34$)					第2クラスタ ($n = 109$)					第3クラスタ ($n = 142$)				
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>SE</i>	<i>Min</i>	<i>Max</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>SE</i>	<i>Min</i>	<i>Max</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>SE</i>	<i>Min</i>	<i>Max</i>
学生生活意欲低下	14.47	3.43	0.59	8	23	12.09	2.93	0.28	5	20	10.23	3.64	0.31	5	22
授業意欲低下	7.06	3.33	0.57	3	15	8.54	2.84	0.27	3	15	5.31	2.54	0.21	3	15
学習意欲低下	11.03	3.51	0.60	4	18	12.28	2.40	0.23	6	19	10.52	3.11	0.26	5	20
注意散漫	7.35	2.23	0.38	3	12	9.91	1.99	0.19	6	14	6.85	1.98	0.17	3	12
大学嫌悪	29.74	8.13	1.39	12	50	22.94	5.52	0.53	10	38	17.92	4.56	0.38	10	31
転出希求	7.06	1.48	0.25	5	10	2.87	1.10	0.11	2	6	2.25	0.67	0.06	2	5

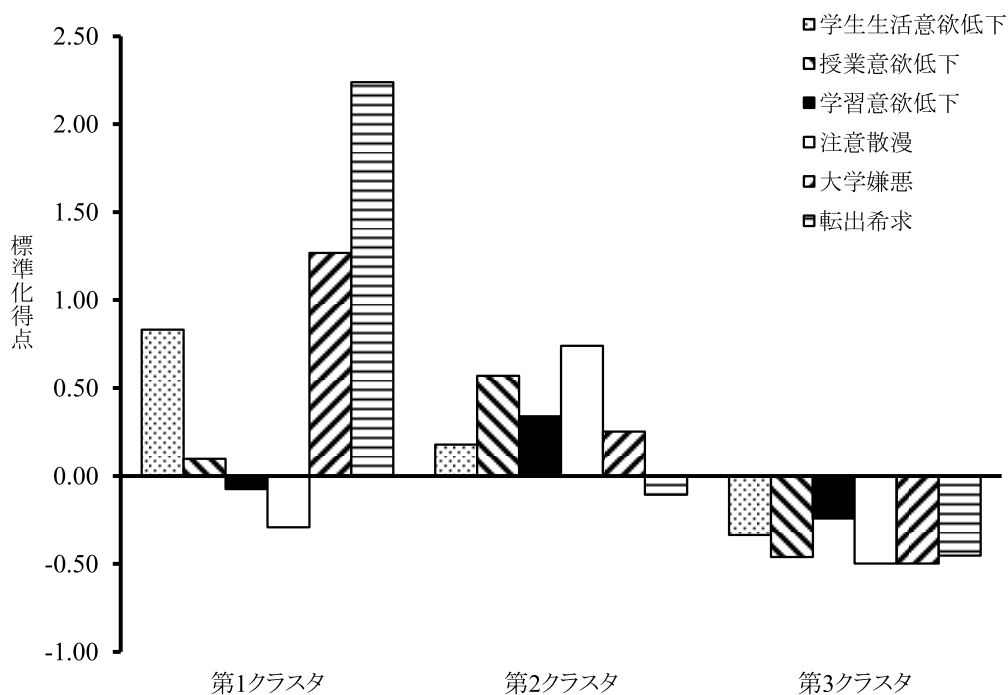


Figure 1. 各クラスタの標準化得点

Table 3
各クラスタにおけるF検定結果

従属変数	要因	df	SS	MS	F	p	多重比較(Tukey) ¹⁾
学生生活意欲低下	クラスタ	2	568.00	284.00	25.14	<.001	3 < 2 < 1
	残差	282	3186.00	11.30			
授業意欲低下	クラスタ	2	647.50	323.70	42.52	<.001	3 < 1 < 2
	残差	282	2147.30	7.60			
学習意欲低下	クラスタ	2	191.70	95.83	11.31	<.001	3 < 2, 1 ≤ 2, 1 ≐ 3
	残差	282	2390.20	8.48			
注意散漫	クラスタ	2	598.90	299.43	73.85	<.001	1 < 2, 3 < 2, 1 ≐ 3
	残差	282	1143.40	4.05			
大学嫌悪	クラスタ	2	4337.00	2168.30	72.78	<.001	3 < 2 < 1
	残差	282	8402.00	29.80			
転出希求	クラスタ	2	639.90	320.00	340.50	<.001	3 < 2 < 1
	残差	282	265.00	0.90			

¹⁾ <は5%水準以下での有意な差, ≤は有意傾向を, ≐は n.s. を示す。

考 察

本研究は、池田他（印刷中）で示された、意欲低下領域尺度（下山，1995）および学校ざらい感情測定尺度（古市，1991）の因子構造を手掛かりとして、大学に対する嫌悪感および怠学傾向による類型化を行い、各類型における特徴を明らかにすることが目的であった。

階層的クラスタ分析を実施した結果、3つのクラスタ解が抽出された。以下、各クラスタの特徴について考察していく。

まず、「転出渴求群」と名付けた第1クラスタ群は、“学生生活意欲低下”と“大学嫌悪”，そして“転出希求”の高さが特徴であった。この群の学生達は、他のクラスタ群と比べて、大学における学生生活への意欲が低かった。“学生生活意欲低下”の因子は、“大学において様々な人との交流が無い”，“大学の中には自身の居場所が無い”といった、大学生活における他者との交流頻度や自己の居場所に関する項目で構成されている（池田他，印刷中）。そのため、この因子得点が低い学生達は、大学生活を送る中で積極的に他者との交流が図れていないだけでなく、大学の中に自身の居場所が無いと感じている、あるいは、見いだせていない特徴がある。重ねて、この群では、大学への嫌悪感と大学や所属学部への転出願望が非常に強かった。他方で、“授業意欲低下”や“学習意欲低下”に関しては、低い傾向が見られた。つまり、この群の学生達は、大学の授業や勉強に不満感やついていけないという不安感を抱いているのではなく、大学生活における他者との交流や、居場所の認識が低いことが原因となり、大学全体に対して嫌悪感や不満感を抱いている可能性が考えられる。そして、その感情の強さが、結果として、大学や所属学部への不安感を高さや、転出への懇願を高めていると推察出来る。

次に、「不活発怠学群」と名付けた第2クラスタ群は、“授業意欲低下”と“学習意欲低下”，そして“注意散漫”の高さが特徴的な群となった。「転出渴求群」との違いとして、「不活発怠学群」の学生達は、“大学生活意欲低下”はさほど高くない一方で、“授業意欲低下”と“学習意欲低下”が高い点が挙げられる。そのため、この群の学生達は、大学生活における人間関係に関しての不満は低いものの、大学の授業や、勉強に関しては消極的な姿勢となっていることが考えられる。大学生のアパシーに関しては、これまでいくつかの知見が示されてきているが（e.g., 笠原，1973；佐々木，1985；山田，1998），第2クラスタに示された「不活発怠学群」は、学業に関して退去傾向を強く抱いていることから、“学業に対する選択的退去型”（土川，1990）の学生に相当すると考えられる。実際に、「不活発怠学群」においては、“転出希求”は低い結果となっていた。つまり、大学への不満感や嫌悪感は抱きつつも、「転出渴求群」の学生達のように、現在の自分の環境を変化させたいと思う程の抵抗感ではないことが推察される。

最後に、「大学適応群」と名付けた第3クラスタ群では、全ての因子得点において低い結果であることが特徴となっていた。このことから、この群の学生達は大学生活や勉強に対して不満や悩みも少なく、大学や所属学部への嫌悪感も抱いておらず、大学への適応度が高いことが推察される。実際に、今回の分析対象となっている半数がこの群に属していることも踏まえると、多くの学生達は大学への適応において、問題が生じていないと考えられるだろう。

以上、本研究で明らかにした、大学に対する嫌悪感および怠学傾向による類型化における各特徴

について考察を行った。既述の通り、本研究において対象となった学生の半数が大学に適応出来ていることが明らかとなった。他方で、約半数は、少なからず、大学に対して不安感や嫌悪感を抱いていることも明らかとなった。牧野・森 (2002) は、大学生を対象として、大学生生活の満足度を調査した結果、約4割の学生が大学生生活に満足していなかったことを報告しており、大学生生活における満足度に影響を及ぼす要因として、“授業への満足度”と“大学生生活での付加価値(人間関係等)”を挙げている。この点を踏まえると、「不活発怠学群」と「転出渴求群」の学生達が、大学の授業や勉学、人間関係や居場所といった大学生生活全般への不安や不満を抱いていた結果と符合する。

本研究では、「大学適応群」以外に属する学生達の多くは「不活発怠学群」に分類されていた。この群の学生達は、大学への不満や嫌悪感は抱きつつも、大学自体の転出願望は抱いていなかった。つまり、学業面における不満や不安を抱きつつも、アルバイトやサークル活動といった、それ以外の場面で人間関係や居場所を作ることで、大学生生活での適応化を図っている可能性が考えられる。これは、近年、着目されている、“学業では無気力であっても、アルバイトやサークル活動など学業以外には積極的に取り組む学生”(笠原, 1976)の増加とも関連していると考えられる。

しかしながら、本研究において特に注目すべきは、「転出渴求群」である。この群に属する学生数は34名であり、他の2群と比較すると少ないものの、既述の通り、この群の学生達は、そもそも大学において自身の居場所の無さを認識しているだけではなく、大学自体への転出願望も強く抱えていることが特徴である。そのため、“大学には自分の居場所は無い”、“大学を変えたい”と思っている学生は、そもそも大学に通うこと自体を拒否している可能性も考えられる。つまり、今回の対象学生の比率で捉えた場合には、「転出渴求群」の学生が少数であったとしても、大学に在籍している全学生を対象として捉えた場合には、この群に属する学生の比率は増大する危険性も孕んでいると考えられる。また、問題となるのは、転出希求を強く抱えている学生達が、“大学において自分の居場所が無い”と感じていることである。これは、既述したように、大学の授業や勉学に対する不安や不満よりも、大学における対人関係や、それに伴う自身の存在価値を誇示する場所の有無が、大学への嫌悪感情や所属意識の強さに大きく影響を及ぼしている可能性を示唆している。

しかしながら、本研究では、嫌悪感と怠学傾向における類型化は明らかとなったが、大学生生活を通しての自身の居場所の有無と、大学に対する嫌悪感との関連性については十分な検討は出来ない。大学生生活そのものに対する意欲低下が、個人の発達的問題やスチューデント・アパシーの心理的障害と関連していることを踏まえると(下山, 1995)、大学への嫌悪感情を強く抱えている大学生が、大学内における自身の居場所の存在をどのように捉えているのか、また、大学内に居場所が無いと感じている大学生の場合、自身の心の拠り所をどのように構築しているのかといった、大学生生活における居場所の有無が、大学生生活を通しての個人の発達や認識にどのような影響を及ぼすのかを検討していくことが、今後、重要な課題であると言える。

引用文献

- 古市裕一 (1991). 小・中学生の学校ぎらい感情とその規定要因 カウンセリング研究, 24, 123-127.
池田龍也・水口啓吾・高野恵代 (印刷中). 大学生の学校嫌悪感と怠学傾向および居場所に関する検

- 討一意欲低下領域尺度および学校ざらい感情測定尺度の因子構造について— 広島大学心理学研究, 15.
- 笠原 嘉 (1973). 現代の神経症性—特に神経症性アパシー (仮称) について— 医療精神医学, 2, 153-162.
- 牧野幸志・森裕紀子 (2002). 大学生生活への満足度に関する教育心理学的研究(1) : 学生は大学に満足しているのか? 高松大学紀要, 37, 59-72.
- R Core Team (2014). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. (<http://www.R-project.org/>)
- Revelle, W. (2015). Psych: Procedures for personality and psychological research, Northwestern University, Evanston, Illinois, USA. (<http://CRAN.R-project.org/package=psych>)
- 佐々木正宏 (1985). 無気力と内閉 中西信男 (編) 現代青年の理解と指導 福村出版 pp.156-171.
- 下山晴彦 (1995). 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, 43, 145-155.
- 土川隆史 (1990). スチューデント・アパシー 同朋社.
- 山田和夫 (1998). スチューデント・アパシーと現代学生の自己形成 精神科治療学 星和書店 pp. 297-304.

謝 辞

本論文は、第1著者・第2著者指導の下、広島大学教育学部心理学系コースで開講している心理学課題演習の授業において得られたデータの一部を用いて構成しています。本研究にご協力いただきました大学生の皆さまに感謝申し上げます。